新住協メンバーによる座談会

地方をハンデにしない これからの家づくり

青森、秋田、岩手の北東北３県は、次世代省エネ基準ではほぼ全域がⅡ地域。
内陸にはⅠ地域も混在する北海道並みの寒冷地で、
住宅にもおのずと質の高さが求められます。
各県で高断熱・高気密住宅に取り組む
ＮＰＯ法人 新木造住宅技術研究協議会（以下、新住協）の会員の方々に、
その取り組みをうかがいました。

まずは住宅性能ありき。省エネ＋上質空間の心地よさ

志村　「高断熱・高気密」と聞いてピンとこない人もいるかもしれません。例えば、オール電化住宅で家を建てて、電気代が非常にかかったという人がいますが、それはもう高断熱・高気密住宅じゃないわけです。オール電化が先にあって、住宅性能が後にある。それで「オール電化って大変よね」という人がいるんです。

星　断熱・気密のない家でも「オール電化＝暖かい家」と思っているお客様が多いですね。

直町　そういうイメージが植えつけられているんですね。オール電化がどうというより、住宅性能の問題でしょう。

志村　そうなんです。実は今日、ハイブリッドカーに乗ってきたんだけれど、燃費が普通の車の半分なんですね。私たちが取り組んでいる高断熱・高気密住宅は、ハイブリッドカーのような住宅にしよう、ということなんですよね。

直町　しかも、できるだけ安く。

志村　ハイブリッドカーは燃費もいいけれど、音も静か、という付加価値があります。高断熱・高気密住宅も、単に暖房エネルギーが少なくなるということだけでなく、真冬でも家中暖かく、床・壁・天井の温度が一定で冷たいところがないという空間の豊かさがあるので、寒い地域に住んでいれば、なおさら快適感は格段に変わりますよね。外の音も聞こえなくて静かですし。ハイブリッドカーに初めて乗って、燃費や静かさに感動するのに似ていますね。

＜青森県＞
㈲直町建設
専務取締役　直町 大一 氏

青森県十和田市生まれ。数年ゼネコン勤務、直町建設入社、現在に至る。シンプルで、より長く住み続けられる家を目指し、基本性能のしっかりした高断熱住宅に取り組んでいる。ローコストな断熱リフォームによる快適な住まいづくりにも注目。

マイナスもプラスに変えて柔軟に暮らす

志村　秋田の沿岸部は、冬は曇天が続くけれど、夏の日射は非常に多いんです。昨年、Q1.0（キューワンスペックで約40坪のオール電化住宅を建て、屋根にローテクの太陽熱温水器を載せたんですが、これが大活躍。3人家族で夏の1ヵ月の電気代が4320円で、お客様もビックリしていました。冬も晴れると窓からの日射で充分暖かいので、暖房はいらなくなるんです。風が吹けば換気システムをはずしても充分換気ができる。Q1.0住宅は、そういう工夫ができるんですね。

直町　風といえば、八戸市は浜風が強いんです。職人さんが冬の外の仕事は勘弁してくれというくらい。それを逆手に取れればいいですね。

志村　秋田県の沿岸部も日本海からの風の影響が強く、冬は地吹雪で列車も飛ばされるくらい、地震より風に対する水平耐力が大きいところです。でも逆にその